法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-08

学生活動サポート助成金とその報告

法政大学キャリアデザイン学部学生サポート委員会

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
生涯学習とキャリアデザイン / Lifelong Learning and Career Studies
(巻 / Volume)
18
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
147
(終了ページ / End Page)
165
(発行年 / Year)
2021-03

学生活動サポート助成金とその報告

法政大学キャリアデザイン学部学生サポート委員会

「学生活動サポートプログラム」は、キャリアデザイン学部の理念に基づき、キャリアデザイン学およびキャリアデザインの実践を推進するために、学生が主体となって企画・運営するさまざまな活動に対して助成を行う制度である。この制度は、学生の社会的活動の形や在り方の変化に対応して、運営の方法を少しずつ変化させているが、いずれにしても学生たちの積極的な社会参画をうながすものとして、教育的役割を果たしてきた。

残念ながら、2020年度、Covid-19の世界的な感染拡大は、こうした学生の活動に大きな影響を及ぼした。申請時には13の団体からの申請があったものの、その後、活動の中止や変更を余儀なくされた活動が多く、最後まで活動を終えることができたのは5件にとどまった。意欲をもちながらも継続できなかった活動に関しては、残念でならない。

一方で、活動が実施できた団体の中には、新しく社会に備わったインフラとしてのオンライン環境を活用したものが多かった。社会の新しい情勢に対応できる学生たちの柔軟さが見られたことは、学部教育の成果とみなせる。また、Covid-19の関係で十分に大学に通学できなかった1年生たちが、自ら活動を組織し、自分たちの状況を発信していったことも、注目に値する。

学生たちには、このような活動を通して、「キャリア」や「キャリアデザイン」について考察や理解を深めていくこと、および、公的な助成金を活用して活動を企画・実行することの意義や責任を学ぶことを期待している。Covid-19の影響はすぐには解消されないであろうが、今後も、こうした事態を打開し、多くの団体から、キャリアデザインの視点に立って社会的に意義のある企画が生まれ、応募されることが望まれる。

なお、本プログラムの助成は、法政大学キャリアデザイン学会から支出されている。当学会の運営にご協力いただいているすべての方々に感謝を申し上げたい。

（学生サポート委員長　遠藤野ゆり）

オレンジカフェ【高校生の質問ルーム】
―オンライン上での高校生とのやりとり―

代表者：岩佐凪唯

1　実施概要

(1)　企画概要

今年度、新型コロナウイルス感染症の影響で今までのあたりまえとされた生活を送ることが難しくなった。大学生も対面授業が制限され、オンライン授業に移行するなど大きな変化があった。大学生だけでなく高校生も、休校期間が長引き、学校での授業や部活動ができないこと、甲子園や吹奏楽コンクールの中止など新型コロナウイルス感染症が与える影響は大きいものであったと考えられる。

このような状況下で、大学生の立場から高校生にできることを考え、「高校生が自分の将来を考えるきっかけを作ること」を目的、「大学生の話を聞くことで高校生が自分の将来像を見出せるようになること」をゴールとして、オンライン上で高校生とやりとりができるLINEオフィシャルアカウントを用いて本活動を2020年5月から開始した。その後、様々な高校生が気軽に質問できる場としてLINEのオープンチャットを2020年6月から開始した。

学生にとっても高校生と関わることで、学生自身のこれまでの経験や知識を振り返るきっかけになり、新たな発見等を得られるのではないかと考えた。

(2)　活動内容

①実施期間

2020年5月～ LINEオフィシャルアカウントの運用開始
2020年6月～ LINEのオープンチャット、Instagram（週に1・2回更新、月に1回1分ほどの動画投稿）、Twitterの運用開始
2021年3月下旬　1年を通しての活動のふりかえり
～2021年3月末に1年の活動を終了予定

※2020年6月から定期的に報告会の実施
※当初、9・10月で高校生との交流イベント（高校生10人ほど、大学生3人）を企画していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止に伴い、実施を断念

②実施内容

1, LINEオフィシャルアカウントでのコミュニケーション

LINEオフィシャルアカウントを作成し、高校生が勉強や学校での悩み、これからの進路についてなどを大学生に相談できる場をつくった。高校生8人（高校1年生から3年生）の利用があり、高校の定期テスト対策や大学受験、大学の学部・授業についての質問があった。

高校生に安心して利用してもらうために、本アカウントの説明、大学生一人ひとりの自己紹介（ニックネーム、高校時代の部活、自粛期間中にしていたこと、趣味）を作成し、利用しやすい雰囲気づくりを行った。LINEの友だち追加後のメッセージを「ぜひ活用してください」で文章を終わらせてしまうと会話が続かないため、「私たちもみなさんのことが知りたいので、名前、趣味、自粛

期間中の過ごし方について教えてね」と一文を付け加え、会話のキャッチボールが続くように心がけた。

LINE オフィシャルアカウントでは、高校生一人ひとりに寄り添ったやりとりを行うことができた。

2, LINE のオープンチャットでのコミュニケーション

多数の高校生と同時にコミュニケーションをとることができ、情報の共有が可能である SNS を用いたいと LINE のオフィシャルアカウントを運用後に考え始めた。高校生の多くは LINE を使用していることが考えられるため、その中の機能の一つである会話や情報交換に特化した仕組みであるオープンチャットの運用を開始した。このオープンチャットは、自分が普段 LINE で利用しているプロフィールとは別にプロフィールを設定でき、友だちにもどのようなトークルームに参加しているかわからない仕組みになっているため、他人の目を気にせずにトークルームに参加することができる。

大学生との一対一のやりとりはハードルが高いと考えている高校生や他の高校生と情報共有をしたいと考えている高校生が気楽に参加できる。LINE のオープンチャットから LINE のオフィシャルアカウントの活動に繋げることも可能であり、その逆も可能であるため、より満足度の高いサービスを提供できたと考える。

3, Instagram での情報発信

前述した 2つの活動で、高校生に活動を認知してもらえていないという問題が生じた。そこで、より広く活動を広めることを目的に、高校生の多くが利用している Instagram の運用も開始した。

Instagram は写真投稿がメインであるため、いかに簡潔に画像で伝えるかを考え、週に 1・2回、法政大学に実際に通っている学生視点からの大学の施設紹介、学生おすすめの法政大学周辺のランチ・カフェ紹介を学生 3人で分担し、投稿した。月に 1度、大学生の高校時代の定期テスト勉強法、高校と大学の夏休みの違い、おすすめの本や映画紹介、おすすめのクリスマススポットなど 1分程度の動画を作成し、投稿した。

4, Twitter での情報発信

Twitter は、Instagram の投稿通知や動画投稿（Instagram と同様のもの）をメインとして活用した。

③活動従事者

岩佐凪唯、龍田まりこ、福島和紗

2　結果・意義・所見

本活動は 1年を通してオンライン上で活動した。本活動は、LINE のオフィシャルアカウントと LINE のオープンチャットに重きをおき、週に 1・2回 Instagram での情報発信を行った。オンラインだからこそ自分の居住地域の近くの高校生だけでなく、地方の高校生ともやりとりをすることができた。これはオンラインで活動を行う大きなメリットだと考える。LINE のオープンチャットでは学生だけの発信だけではなく、高校生同士、将来についての会話がなされているなど高校生が将来を考えるきっかけになったといえる。

学生も、学生の経験や知識をどのように活用できるか考える機会になり、相手に寄り添って的確に伝えることができた。

(1)　文面でのコミュニケーションの難しさ

前述したように、日本各地の高校生と大学受験や進路などについてやりとりをすることができた。高校生とのやりとりを重ね

ていくうちに、文面でのコミュニケーションの難しさを感じた。対面では、相手の表情や反応を見てコミュニケーションをとれるが、文面ではそれができないため、こちらが考えているものとは違う意図で伝わってしまうことがあった。

今回はコミュニケーションツールをLINE一つに絞ってしまったが、相手の表情を見ることが可能であるZoomやCisco Webexなどをツールとして取り入れることで、改善されると思う。

(2) SNSでの情報発信

本活動では当初、LINEの運用のみを考えていたが、本活動をより広く高校生に認知してもらうことを目的としてTwitterやInstagramの運用も始めた。そこで大学受験だけではなく、大学生活や大学の施設紹介に関心をもち情報を求めている高校生も多い。LINEオフィシャルアカウントでも、「Instagramの投稿見ました」や「参考になります」との声があった。

しかし、Instagramのフォロワーは、本活動と類似した活動をしている学生団体のフォロワーが多く、実際にターゲットとしている高校生のもとまでたどり着いていないことがわかる。情報を必要としている高校生やターゲットとしている高校生に関心をもってもらうために、より高校生のアカウントをフォローしていく必要がある。加えて、投稿内容の充実も必要である。

Twitter、Instagramの投稿通知や動画投稿を主として運用していた。しかし、Twitterをうまく活用できていないことが2021年2月の報告会で挙げられた。加えて、InstagramとTwitterでは、それぞれ利点が異なるため、Twitterでは質問箱の設置や、大学生の日常をツイートするなどが改善策として挙げられた。学生がそれぞれのSNSのメリット、デメリットをしっかりおさえて活動に取り組むべきであったという反省がある。

(3) 高校生とのコミュニケーション

LINEのオフィシャルアカウントでは8人の高校生と、オープンチャットでは、6人の高校生の利用があった。LINEのオフィシャルアカウントは、高校生とのやりとりがなかなか続かなかったのだが、オープンチャットは2020年10月から2021年2月まで動いていた。このことから、大学生との1対1でのコミュニケーションは緊張することなど高校生にとってハードルが高いこと、自分以外にどのような人が利用しているか、どのような質問が主にされているかが目に見えないことから他人の目（相手の大学生）を気にしている様子がみられた。

(4) 本活動の大学生の参加

本活動に参加していた学生が女子のみであったため、男子高校生にとっては利用しにくい環境であったこと、学生が全員が文系だったことが課題として挙げられた。来年も活動を続ける場合、この課題を解消していく必要がある。

キャリアストーリー
―学生の学生による学生のためのキャリアトークセッション―

代表者：中野涼

1　連携した学外の個人・団体名

・中部キャリアコンサルティング普及協会
　代表 中村 英泰 様（発足及び協賛者）
・アチーブメント株式会社
　人事部 山森 拓実 様（第7回登壇者）
・国家資格キャリアコンサルタント
　佐々木 隆太 様（第9回登壇者）

2　実施概要

(1) コンセプト

当団体は、同年代のキャリア形成に対して今歩んでいる道とは別の道を発見・考えさせる場所を作ることをコンセプトに活動してきました。各々がより良いキャリア形成を行うために、どうすればいいのかを考え、共有する場所です。キャリアには答えがありません。キャリアストーリーはキャリアについて考える場を作り、仲間の意見を聞き、自分の理解を深めようとします。無理に答えを求めるのではなく、自分の中にある思いを言葉にしようとする場所であり、当団体はキャリア形成の第一歩は自分の思いを言語化することであると考え、そのきっかけをクリエイトしてきました。

(2) 企画運営にあたって

①キャリアストーリーの始まり

当団体の始まりは、2020年5月までさかのぼることになります。法政大学キャリアデザイン学部3年柏崎唯人氏と中部キャリアコンサルティング普及協会代表の中村英泰氏の共同で開催された「キャリアのカタリバ」を前身とし、本団体の代表である中野によって1年生向けに開催を行ったのが始まりになります。当初は、本学付属校である「法政大学第二高等学校」の卒業生4名の有志により開催を行ってきました。当団体では、今年度5月より活動を始め、全9回の企画を行ってまいりました。以降に、その内容とセッションによってどのようなことが生まれたのかということに関して報告してまいります。

②全10回の開催を振り返り

第1回は2020年6月に実施しました。「インターンとは○○である」というテーマで、インターンとは何かということを考えるセッションでした。当セッションでは、法政大学キャリアデザイン学部2年田邉翔氏にご登壇いただき、なぜ大学1年生から長期インターンを始めたのか、ということを中心にインタビュー形式で行いました。第1回開催では、当事者の話を聞き、インターンって何なのかということを中心に、ポスト高校生を卒業し、プレ社会人になるためにはどのようなことをすればいいのかということを参加者同士で話し合い、考え…というセッションでした。

第2回では、本学キャリアデザイン学部の児美川教授の書籍「キャリア教育のウソ」を参考にし、参加者それぞれにとっての「キャリアアンカー」は何かということについて取り上げました。

特別回として、第2回開催後に「オンラ

インパソコンカフェ」を実施いたしました。当セッションでは、学生の課題感の強い「パソコン」に関する使い方講座をオンラインにて実施しました。表計算ソフト Excel に関して基本的な操作方法と表計算の仕方、関数の使い方、グラフの作り方などのレクチャーを行いました。講師には高校時代に情報系の高校に通われていた法政大学キャリアデザイン学部 1 年佐藤氏と同学同学部 1 年前田氏に協力をいただき、講師を務めて頂きました。Excel に関しては、今後、研究を行う際や社会に出た際に必要になってくることや、社会人への調査結果で、基本的なパソコン操作ができるべきであるという意見が多いことから、今回、Excel 講座の実施に至りました。

また、第 3回では、「プレ社会人になるためには」というテーマを取り上げてきました。以降、セッション実施後のアンケート調査に基づき、参加者の課題感や問題意識を参考にし、テーマ設定を行いました。以下に第 1回からのテーマの一覧になります。

《開催テーマ一覧》

・第 1回
「インターンとは〇〇である」
・第 2回
「あなたのキャリアアンカーとは？」
・【番外編】パソコンカフェ #1
「Excel の基礎知識」
・第 3回
「プレ社会人になるためには」
・第 4回
「21卒しか知らないコロナ就活のトリセツ」
・第 5回
「オンライン春学期大反省会」
・第 6回
「あなたの強みはなんですか？」
・第 7回
「今、採用したい人財」
・第 8回
「社会人 0年生のビジネスマナー講座」
・第 9回
「キャリアのプロが語る『転職と展職』」

3　開催における意義と成果

(1) 参加者の変化

当団体の運営するセッションは主としてキャリアを軸にその在り方を考えなおすものが多くありました。今日、組織内における企業に身を置くキャリア形成が終焉を迎え、個人がキャリアのオーナーとして意思決定を行わなければならない時代に突入をしています。そんな中、現在のキャリア界は「個人」にフォーカスをしすぎた結果、キャリアの孤独化を招いている現状です。

こうした状況を改善すべく、当団体ではキャリアに関して共に考える仲間を見つける場や、キャリアに関する知識を身に付け、これから先に襲ってくるであろう「暗黙の時代（変化が激しいために先が見えにくい時代）」を生き抜くための方法論を身に付ける場所を作るのがキャリアストーリーです。

こうしたセッションの開催を通し、参加者においては、キャリアに関する基礎的な知識や新しい考え方を習得し、これから先の社会で生き抜くすべを学ぶことができたものと考えています。また、昨今のコロナ禍による大学のロックダウンにより、学生間のつながりがないということが問題となっていたために、他者との交流やコミュニケーションの場として有効活用されており、オンライン下であっても、参加者のコミュニケーション能力の向上や他者理解を深めるなど、非認知能力（※）の育成にも貢献できたものと考えています。

※非認知能力：学力や IQ のように数値で表せる能力ではなく、対人関係スキルや

SEL/EQ などの数値で表すことのできない能力の総称。

(2) 開催者側の変化と成長

参加者だけではなく、運営を行ってきた開催者側の能力向上も見られました。

a) ICT スキルの向上

当イベントは10月以降、オフラインでの開催を目標に掲げていたが、コロナ感染症の拡大を背景に、密を避ける観点からオフラインでの開催を中止し、完全オンライン(Zoom)で全9回のセッションの運営を行ってきました。そのため、開催に際して行う打ち合わせや集客、マーケティング等々のすべてをオンライン上で完結させなければなりませんでした。

Zoom を活用して定例 MTG の実施や Twitter を用いて集客を行う他、イベント登壇者への連絡もまた Twitter を活用して行ってきました。こうした今日、必要とされる ICT や SNS を活用して運営を行ってきたことにより、運営メンバーの成長を図ってきました。これからの時代、ICT スキルや SNS の活用は必須事項になるものと考えられています。これらの能力をセッションの企画・運営を通し、実践的に学ぶことを可能にしてまいりました。

b) プレゼンテーション能力

当団体のセッションでは、スライド資料を用いてメインルームでは、プレゼンテーション形式での説明と登壇者とのトークセッションを行う形で運営を行ってきました。

スライド作成では、必要な情報と不要な情報を正確に判断し、スライドに記載すべき事項か否かを判断していくうえで、参加者に見やすい構成にするというように、様々な情報を考えた上での作成を心がけてきました。また、メインルームでのファシリテーターは、30人近くの参加者を前に、説明を行うということもあり、緊張感と責任感など様々な感情を胸に説明を行うことになります。こうした経験は、社会に出た際に、新規事業の提案時や書類作成などの業務において、見やすい資料作成などを心がける力や、その発表時に聞き手を飽きさせない工夫などを実践的に学んでまいりました。また、研究発表や卒業論文の発表時にも活用できる能力であると考えております。

それだけではなく、企画・運営に際し、登壇者との連絡作業や、集客などを通し、対人関係スキルやビジネスマナーなどの非認知能力の向上をみることができました。

4 最後に

今日、社会を取り巻く暗黒、コロナウイルス。With コロナの時代はこれからも続くことが想定されます。こうした社会、時代を生き抜くために、キャリアに関する考え方がより多くの人のもとに届くことを心より願います。

代表挨拶

2020年6月初めて「キャリアのカタリバ」としてのセッションを行ってから全9回の開催を行ってきました。中部キャリアコンサルティング普及協会の中村様には、組織立ち上げの際から助言やセッションに対するご意見などをいただいてきました。また、第7回にはアチーブメント株式会社より山森様にご登壇いただき、コロナ禍の人事の変化とその中で生き抜くために必要な方程式をご教授頂きました。第9回にはキャリアコンサルタントの佐々木様にもご登壇をいただきました。

当団体は、当初、4名の運営メンバーで設

立をしてまいりました。全9回のセッションを開催できたのは、わたしを除く初期運営メンバー3名と協賛いただきました中村様やご登壇いただきました山森様を始め、キャリアデザイン学部生（佐藤氏、前田氏）、運営を手伝ってくださった5名のキャリアデザイン学部生（今井氏、石川氏、金山氏、髙松氏、辻氏）、そして何より、参加してくださった参加者の皆様のお力もあり、今年度開催をすることができました。

この場をお借りし、ご協力をいただきましたすべての皆様に感謝の意を述べさせていただきたいと思います。

そして、これからの日本が、社会がすべての人が自由にキャリア形成をできる時代になることを心から願っております。

オンライン上での芸術活動が子どもに与える影響を探るワークショップの実践

代表者：石川日菜

1　連携した学外の個人・団体名

音楽教育スタジオ「オトノアジト」
（東由香梨、渡邉麻美子〔以上講師〕、ほか同スタジオ生徒５名）

2　実施概要

（1）活動の趣旨

本企画は、新たな芸術文化活動のかたちとして「オンライン上での創作活動」の可能性を提示し、その具体的な手法と活動の効果を探ることを目的としている。オンライン教育の形式を用いたワークショップの実践を通して、子どもたちに教室での学びとは異なる新たな芸術教育のかたちを体験してもらい、それが彼らの成長にどのような影響力をおよぼすのかを検証した。小学校の学習指導要領なども参考に、子どもたちの①創造力②協調性③柔軟性の３点を高めることを目ざした。

（2）活動の概要

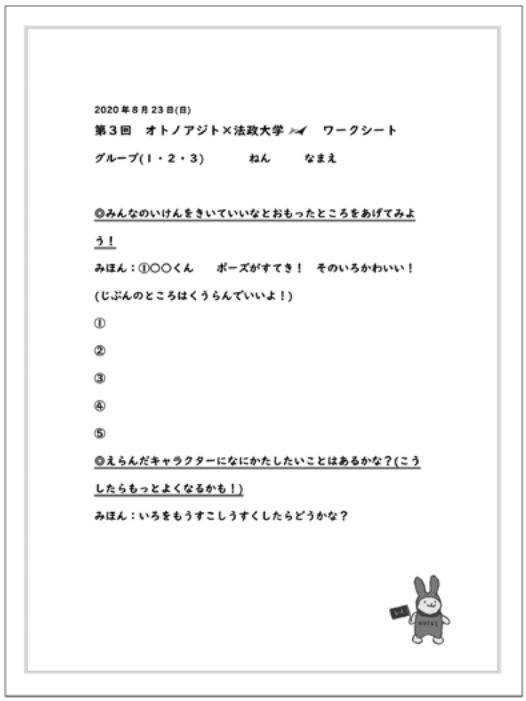
①準備

6月からゼミ生のあいだでイベント内容の検討を始め、音楽教育スタジオ「オトノアジト」との打ち合わせも複数回オンラインで実施し､最終的に｢オトノアジトのイメージキャラクターを作る」というテーマになった。

7月中にワークショップのプログラム詳細を決定し、音楽教室の生徒たちに向けて参加者の募集を開始した。子どものアート教育やキャラクターに関する先行研究なども参考に、ワークシートを事前学習用と本番５回分作成し、法政大学の「えこぴょん」グッズ（見本用）とともに参加者の自宅に発送した。

②本番

8月から９月初めにかけて、キャラクター作りを行うワークショップを開催した。参加者である小学生低〜中学年５人、音楽スタジオの講師の方がた、サポート役の大学生３人程度の少人数構成で毎週日曜日午後にオンライン上で実施。各回40分程度で、ワークショップの前後にゼミ生と音楽教育スタ


2020年8月23日(日)
第３回　オトノアジト×法政大学　ワークシート
グループ(１・２・３)　　ねん　　なまえ

◎みんなのいけんをきいていいなとおもったところをあげてみよう！
みほん：①○○くん　ポーズがすてき！　そのいろかわいい！
(じぶんのところはくうらんでいいよ！)
①
②
③
④
⑤
◎えらんだキャラクターになにかたしたいことはあるかな？(こうしたらもっとよくなるかも！)
みほん：いろをもうすこしうすくしたらどうかな？

図１　当日用ワークシート（第３回）

ジオのスタッフで打合せと振返りを行った。

実施テーマは以下の通りである。

第1回「キャラクター作りの基本を知ろう」
第2回「どんなキャラクターが必要か考えよう」
第3回「キャラクターをつくってみよう」
第4回「キャラクターを完成させよう」
第5回「キャラクターの発表をしよう」

参加者には、事前に使うものと当日使うものの2種類のワークシートを配布した。毎回、事前ワークシートを行うことで、予習や復習を通して理解を深め、当日のワークシートに取り組みやすくなる仕組み作りを工夫した（図1）。

第1、2回では、主に講義形式で、ゼミ生から子どもたちにキャラクター作りの基本を伝えた。そもそもキャラクターは何のために必要とされるのか、また色や形はどのような効果を生み出すのかといったことを学ぶことで、今後のキャラクター作りに活かされることを目指した。併せて、「オトノアジト」のスタッフから、教室が目標としているものについてお話ししていただき、今回のキャラクターのイメージを思い浮かべるのに役立てた。

第3、4回では、キャラクターの見た目だけでなく、好きなものや性格など内面まで深く考えるワークを行った。参加者同士で意見を交換することで新しい視点を取り入れ、キャラクターを完成に近づけた（図2）。

最後の第5回では、「発表会」と称して子どもたちがそれぞれ考えたキャラクターを発表し、感想などを話し合った。

図2　各参加者が作成したキャラクター

③実施後の検証

ワークショップ終了後は、フィードバックの会議をオンラインで行った。また各回の記録動画をもとに、子供たちのワークショップ内での様子や変化を分析し、本企画の効果を検証した。その結果を、学生研究発表会にて報告した。

3　結果・意義・所見など

（1）結果

ワークショップを通して子どもたちが考えた名前や性格、好きなもの、好きな音楽、見た目などを反映させて、五つのキャラクターが作成された。これらはゼミ生によってデジタル・データ化され、すべて音楽教室のイメージキャラクターとして採用され、教室のホームページ等に掲載されている（図3）。

（2）考察

①オンラインでのアート教育について

a）良かった点

その利便性から、オンラインでいろいろ

図3 「オトノアジト」のホームページ

な活動を行う機会は、コロナ禍が終息したあとも増えていくと推測されているが、今回のワークショップは、子どもたちがオンラインを通じた創造的な学びに慣れる機会を生み出したと考えられる。例えば、紙に描いた図をパソコンの画面上で共有する時に、他の人が見やすくなるようにワークシートをカメラの前に持ってくるなど、参加者が少しずつオンライン上で工夫していった様子が見られた。

b）課題

対面での開催に比べて、参加者同士の一体感や臨場感が低かったと感じた。具体的には、他人の発言中に自分のワークを進めてしまったり、集中力が続かなくなってしまったりしたこと、また盛り上がりに欠けたムードになった瞬間があった。これは、現実に同じ空間にいないために起きやすくなることだと考えられる。参加者側がオンライン上でコミュニケーションを取る機会を重ねることで慣れていくこと、また運営する側も積極的に声がけをしながら、みんなで場を共有しているという雰囲気を作り出すことが大切であると考える。

②キャラクターデザインというテーマ設定について

a）良かった点

まずキャラクター作りに関するレクチャーを受けた上で、キャラクターを通して自分の考えたことを表現する機会を持つことができた。ここでは、単なる外見だけでなく、名前や性格、好きな曲など、キャラクターにまつわる様々な要素を考えることができた。何かをデザインする際の技術の習得や、他の作品の模倣といった受け身の芸術活動ではなく、自身の経験や思考をもとにオリジナリティーのある作品を作るという、能動的な活動になったといえる。

例えば、可愛らしさを重視しようという考えのもと、「春」というテーマで統一したキャラクターを作成した子どももいた。名前は「春ちゃん」で、デザインはハート・花びら・桜を用い、スカートを着た女の子になった。また、「森のくまさん」の歌からインスピレーションを得て、キャラクターのプロフィールに一貫性を持たせた子どももいた。動物の熊をモチーフに、好きな楽器はピアノ、名前は「おんべアー」、出身は森という設定であった。

はじめにキャラクター作りに関するレクチャーを受けたことで、ワークショップを受ける前に事前学習として作成していたキャラクター案よりも、頭を大きく三頭身にしてキャラクターらしさを出すとか、明るい色使いをするなど、すべての子どもたちに変化が現れた。

b）課題

音楽スタジオのホームページで掲載するなど、プロモーション的な目的で使用するキャラクターという完成度までは、子どもたちのデザインのみでは到達させることができなかった。最終的には、参加者が描いたキャラクターをもとに、学生側が細かいデザインの補正などを行ってデジタル化した。

③ワークショップの形式について

キャラクターを個人で作成した後、みんなの前で発表する機会を設けたため、喜びや楽しさを他者と共有することができた。また、ワークショップは計五日間にわたって開催したため、継続した企画による参加者の言動の変化や成長を実感することができた。例えば、回を重ねるごとにパソコンのマイクに向かってしっかりと大きな声で発表できるようになった子どもがいた。初めの方の回では、対面とは異なる方式にま

だ慣れていない様子も見られたが、他の人の話を聞いて相槌をうったり笑顔を見せたりするなど、リアクションを積極的にとる姿も次第に見られるようになった。

(3) まとめ

子どもたちは回を重ねるごとにオンラインでの方式に慣れてきたことが確認できたが、それと同時に、オンラインでの会話においては、非認知的要素・非言語コミュニケーションが伝わりにくいという特徴があることが明らかとなった。このことから、オンラインでのワークショップ開催を通した教育を行う際には、非言語行動を大きく見せる必要があると考える。一方で、そうしたオンラインの特質に留意しつつ企画を構想・実施することで、本プログラムの目的に掲げたような、①子どもたちの創造性を養うことや、オンライン上の学びを通して②協調性と③柔軟性を養うことは、十分に可能であることが分かった。

今回行った地域の音楽教室とのコラボレーションによるアート教育活動は、コロナ禍におけるアートマネジメントの一つのあり方である。今回の企画を通して得られた課題や、それに対する解決策を活かして、アートマネジメントの可能性をさらに広げていきたい。

三鷹市立第五中学校でのキャリア支援プロジェクト

代表者：阿久津明日香・佐藤裕理

1　連携した学外の個人・団体名

鷹南学園三鷹市立第五中学校

2　実施概要

(1) 企画実施の背景

昨年度まで伊豆大島にある小中学校との企画をしていたが、今年度はコロナウイルス感染拡大防止の影響により伊豆大島への訪問を断念した。そこで、昨年度までお世話になっていた伊豆大島の第二中学校で副校長をされていた大野先生が現在校長として着任されている鷹南学園三鷹市立第五中学校（以下､第五中）を紹介していただいた。本企画は我々ゼミ生がいくつか企画を考え、大野先生にプレゼンするというところから始まる。我々が考えた企画は特別支援学級向けに物をつくり、それを玩具のお金などを使い物の売買を経験する者や、キャリア教育プログラム、生徒と学生限定のコンテストに参加するものがあった。第五中としても生徒の主体性や大学生と関わりを持てる機会は貴重とのことから、かなり良い返事がもらえたが、第五中の現状としてコロナウイルスの影響で年間カリキュラムが大幅に遅れており今年度は時間が割けないという回答だった。しかしその中でも何か第五中の生徒にできることはないかと大野先生から検討いただき、隔週放課後に行われる学習支援ボランティアの参加を提案して頂いた。企画の内容は（2）にて記す。

学習支援ボランティアの背景としては、今年度はコロナウイルスの影響から、臨時休校によって、学習に大幅な遅れが生じ、生徒の学習意欲にも低下がみられたことが挙げられる。遅れを取り戻そうと必死になっている先生方の教育の手助けと、生徒の学びの手助けをすることを目的に企画をした。また、大学生にとっても中学生にとっても、普段の生活の中で、兄弟姉妹以外の大学生や中学生の交流機会はあまりないため、学習支援を通して交流をし、相互理解を進めていくというのも目的の1つである。

さらに現在第五中は全生徒タブレット支給を開始している。これは三鷹市のICT教育を促す取り組みの一環である。しかしながら、このiPad支給は学校としてもコロナ渦の中で急遽決まったことであり、教員側としても生徒側としても使い方が分からないなど不安な点が多くあるとのことだった。そこで大野先生をはじめ、第五中の教員の方々から、ぜひ普段からタブレットやパソコンを通じてICT教育に身を置いている私たち大学生から、第五中の生徒、教員にタブレットの活用方法を教えていただきたいとの要望をいただき、タブレットの使用方法も含めた学習支援ボランティアを行うこととなった。

(2) 企画の内容

本企画は、第五中と連携したプロジェクトである。本企画では学習支援ボランティア活動を中心としたフィールドワークを行う。この活動には第五中側のニーズに応えながら、大学生にもメリットがあるもので

ある。学校のニーズとしては、放課後の学習支援員が現状不足しており、すぐにでも人手が欲しい状態とのことだった。大学生としては、中には教職をめざすものも多く、教育現場に立ち会えるのは貴重な経験だ。また、コロナウイルスの影響で今回は延期になってしまったが、上記のような我々が企画したプロジェクトもこの学習支援ボランティアを通じてさらに生徒に寄り添った提案ができると考えられる。

具体的な活動内容としては毎週水曜日の放課後に行われる学習支援に隔週大学生が2人ずつ参加し、生徒に勉強を教えるといったものである。生徒は上記の通り1人1人iPadが支給されており、三鷹市が管理する教育システムを利用しながら学習を行っている。この際、我々もiPadを持っていたほうが生徒に使い方を教える際、さらに効果的になると考え、1台iPadを購入した。第五中は上記の通り年間のカリキュラムが大幅に遅れていることから、普段よりも短い期間での学習を余儀なくされている状態である。そのため、この学習支援を利用する生徒も多く、我々としても中学生に勉強やタブレットの使用方法を教えながら、実際の教育現場の内情について知ることができている。

(3) 実施期日

12月18日（金）　校長先生へ企画書提出
（全員）

1月27日（水）学習支援①　（宇野・佐藤）
2月3日（水）　学習支援②　（佐藤・阿久津）
2月10日（水）学習支援③　（宇野・坂本）
2月17日（水）学習支援④　（坂本・銘苅）
2月19日（金）学習支援⑤　（高橋・阿久津）
2月24日（水）学習支援⑥　（銘苅・川口）
3月3日（水）　学習支援⑦　（高橋・坂本）
3月10日（水）学習支援⑧　（銘苅・阿久津）

(4) 企画従事者

阿久津明日香・宇野瑠奈・銘苅円花・川口真優・風間愛理・松下愛子・定方梨緒・佐藤裕理・高橋瑞希・坂本優生・深澤大志
計11名

3 結果・意義・所見

本企画を実施した結果と、そこから分かった教育現場における大学生ボランティアの意義、今後の活動に向けての振り返りを以下で述べていく。

(1) 中学校における学習支援の必要性

以前まで、第五中での放課後学習支援では、OB/OGの保護者の方が中心となって行っていたようだ。私たち大学生が企画書を提出した際にも大野校長先生から、中学校のみならず、教育現場において学習支援は極めて重要なものであるというコメントを頂いた。学習支援をした中で、同じクラスで同じ授業を受けていても、生徒の理解度は様々で、授業の内容をその時に理解できる生徒もいれば、授業についていけない生徒や分からなくてもそのままにしてしまう生徒などもいる。後者にとって、学校で授業以外に個別で対応してもらえる学習環境の提供は必要なことだと思う。学校の先生方も一人ひとりのペースに合わせた授業の展開は不可能だ。学習支援の場は生徒の学びの手助けになるとともに、先生方のフォローにもつながるのではないだろうか。

また、今年度においてはコロナウイルスの影響で学校が臨時休校になったこともあり、生徒の学習に大きな遅れが生じたことから、学習支援の場は利用する生徒にとっては大きな助けになっていると感じる。

(2) 教育現場における大学生ボランティアの意義

企画書提出の際に、大野先生からは学習支援のみならず、教育現場においてボランティアの人材はとても重要だと教えていただいた。私たちは今まで、生徒として学校に所属していたため、どのくらい先生たちが忙しいのかなど気にも留めていなかった。しかし、実際、今回のように教育現場にボランティアという形ではあるが、生徒に何かを提供する側になって大野先生のお話を聞きながら、学校の先生の仕事を考えた時、休む暇もないくらい1日が過ぎていくことが見えてきた。特に部活動においてはほとんどボランティアのような形になっていることは確かである。そのため、第五中でも部活動支援員という、先生の代わりに生徒たちに指導をする部活動の外部コーチ的な存在を募集しているそうだ。部活動支援員は時間さえ合えば、私たち大学生が即戦力になるだろうと考えられる。以上により、部活動においても、学習支援においても学生という立場を活かしたボランティアの必要性を感じる。

これらのことに関しては、今回の第五中との企画がなかったら知ることができなかったため、教育現場の内情を知る上でとてもよい機会になったと考えている。

(3) ICT 教育

文部科学省によると、AI やロボット、SNS などの急速な普及からもわかるように、これからの社会を生きていく中では MUST となる ICT の活用。日常から ICT 機器に触れていくことが必要であることから ICT 教育の促進が必要だとされている。

第五中では、今年度から生徒1人に1台 iPad を配布し ICT 教育を進めている。配布したのはいいものの、先生方の知識や技術が教えるまでに追い付いていないという課題に直面している。これは、第五中に限った話ではないだろう。今までのノートと筆記用具の教育から一転した方法での教育に戸惑うのも無理はない。

ここでも、普段からパソコンやタブレットを使いこなす私たち大学生が即戦力になるのではないだろうか。まずは学習支援の際に iPad を使用し、操作方法や使用方法を指導し、今後、その効果的な使用方法（学習システムのみならず、PPT や Excel などの使用）について先生方と力を合わせて指導していきたい。

(4) 今後の活動について

学習支援

現段階では春休み前の3月10日を今年度最終日と予定しているが、今後、第五中との話し合いをし、来年度も継続していきたい。

iPad の指導

先述のように、ICT 教育には様々な課題がある。購入した iPad を最大限に活用し、プレゼンテーションなどでの PPT 資料の作成や、Excel などを使ったグラフや表の作成など、私たちのできる範囲で基本的な技術の指導をし、私たち大学生が少しでも力になれるよう努めていきたい。

その他の企画

今回はコロナウイルスの影響によりできなかった企画も、コロナウイルスが収束したら、前回のプレゼンテーション提出した特別支援学級との企画や、コンテストへの参加の企画など、ご指摘いただいた部分を考えなおし再度企画書を提出したり、これからの交流の中で新たに見えてきた課題やニーズに対する、大学生の視点から考えた様々な企画を提案したり、第五中の生徒のキャリア支援へつながる活動にしていきたい。

高岡向陵高校への支援
―大学生によるキャリア支援ボランティア活動―

代表者：笹生豪

1　連携した学外の個人・団体名

今回は、富山県高岡市に所在する私立高岡向陵を対象に企画を行う。私立高岡向陵高校の「未来探究コース」に属する２学年の１つのクラスを対象とした。

2　実施概要

(1) 企画概要

本企画は、経済的・地理的貧困を抱えている高校生に対して、主に進路について方向性を見出せるようになってほしいという願いから始まった。

経済的貧困では、家庭の貧困状況が考えられる。中には、学費を奨学金で賄うだけでなく、生活費をアルバイトから出す生徒がいるのが現状である。このような経済的理由から、就職を選択する生徒もいる現状である。

地理的貧困では、富山県は公立上位の傾向にある。私立高校は滑り止めか、あるいは公立高校を受験しても合格する可能性が全くない生徒が専願する場合のどちらかである。そのため､私立高校の生徒は基本的に、受験における挫折経験や進路選択に諦めを抱いている状況である。

これに加えて、進路の選択過程には、地方に独特の問題があることが指摘できる。生徒の多くは、進学先や就職先として、富山県内、遠くても北陸地域を選択する傾向にある。もちろん生徒たちが主体的に選択した結果であれば地元志向は問題ではない。しかし、視野を広げればより自分の学びたい学問ややりたい仕事があるにもかかわらず、奨学金の情報なども含めて、自分たちに本来は可能な選択肢が見えていないがために進路の選択肢が狭まっている現状は、非主体的な進路選択状況である、といえる。

こうした経済的・地理的貧困を抱える高校生には、キャリア形成が固定化してしまうという問題が生じてしまう。進路の選択が狭まっている生徒たちの可能性を広げることがボランティアの目的である。

実際、高校の先生方との打ち合わせにより、先生方には地元の企業への就職や地元の大学への進学を選択するにしても、しっかりと自分のキャリアについて考えてほしいという願いが明らかとなった。

そこで本企画では、高校生が自分のキャリアについて主体的に考えることができる時間、場の提供、高校生のキャリア形成の具体化を目的として実行する。また、大学生自身もこれまでの経験を振り返ることとなり、自己のキャリアについても考える機会となる。

(2) オンラインでの交流会

①全体の概要

本年度はコロナウイルスの影響により、実施に訪問し、交流することが厳しい状況であったため、活動はZoomを使用したオンラインでの交流を中心として行った。実施日程及び内容は以下の通りである。

【企画日程】

・高岡向陵高校教員と大学生の打ち合わせ

日程：2020年5月21日
内容：活動方針及び内容の確認

・第1回オンライン交流
日程：2020年6月18日
内容：アイスブレイクを踏まえたワークを実施　高校生自身が自分の体験についてお話することを目標に交流

・第2回オンライン交流
日程：2020年7月28日
内容：夏休みの過ごし方を「遊び」「勉強」「進路」を題材に一緒に考えるワークを実施

・第3回オンライン交流
日程：2020年8月8日
内容：東京の大学紹介、大学生の日常（サークル）を題材に高校生へ紹介

・第4回オンライン交流
日程：2020年8月15日
内容：東京の大学紹介、大学生の日常（学祭）を題材に高校生に紹介

・第5回オンライン交流
日程：2020年8月22日
内容：進路相談会　高校生が自由に大学生に相談できる時間を確保

・第6回オンライン交流
日程：2020年11月5日
内容：来週の対面交流に向けたアイスブレイクを実施

・対面交流
日程：2020年11月12日
内容：アイスブレイク及び、「職業マップ」「自分史シート」「学校調べ」を用意し、ワークを実施。

・第7回オンライン交流
日程：2021年1月21日
内容：対面交流を終えた後の近況確認。

・今後の予定
2、3月に一回ずつオンライン交流を予定。

②オンライン交流での成果及び反省

Zoomを活用したオンライン交流により、年間を通して定期的な関わりが可能となった。地方という地理条件に関わらず、首都圏の大学生と関係が持てること自体に成果があったと考える。

毎回のオンライン交流前後には大学生が企画、実行、反省を行い、企画内容の決定、改善を行った。また、スプレッドシートを活用し、大学生が高校生の様子を記入し、活動による高校生の変化を記録していった。

反省点としては、オンライン上では、充実した関係の構築ができなかった。そのため、コロナウイルスの感染拡大防止に最大限の配慮をしたうえで、学校の了解のもと、対面での交流を実施するとした。

③対面交流の概要

対面での交流を企画した。コロナウイルスの感染拡大状況を考慮し、11月12日に交流会を実施した。

【感染拡大防止の取り組み】

高岡向陵高校の先生方と話し合い、感染拡大防止のため、以下の工夫を実行した。
・宿泊施設は1人1部屋
・交流会2週間前より検温の実施
・フェイスシールドの購入
・消毒スプレーの準備
・マスクの着用

【交流会ワーク内容】

対面での交流会では、大学生と高校生の

双方向的なワークを行い、進路に関して大学生からの意見を新たに得ることで高校生の視野を広げることを目的として実施した。また、同時に今後のオンライン交流においての関係向上を目的としてアイスブレイクを実施した。

ワークとしては3つのワークシートを用意した。1つ目の「職業マップ」では、どのように社会とかかわっているのかをヒントに身近な例を用いて社会に存在する職業を探してみるというワークである。2つ目の「自分史シート」は自己の経験から、興味関心、心境の変化などを見つめ直すことで、新たな自己を発見することを目的としたワークである。このワークによって、自分に適した、あるいは、興味のある職業の発見へとつながればよい。3つ目の「学校調べ」は、実際に進学先を調べることで、具体的な進路をイメージすることを目標とした。その際、大学生は調べる作業を補助するだけでなく、大学生自身のキャリア選択の背景などを参考として提供することで、高校生が進学先を決めるきっかけとなることを期待した。それぞれのワークシートは、進路状況や生徒自身の興味関心に合わせて、どのワークシートを実行するかを決めていった。

また、ワーク中の雑談も重視し、関係構築に努めた。大学生活を話すことも、高校生にとっては、大学生のイメージを持つことへとつながるだろう。

3　結果・意義・所見

(1) 結果

交流によって、生徒の変化が見られた。様々な職業に興味を持つようになったり、大学を比較することによって志望校を決めていったりとそれぞれの生徒の状況によるが、キャリア支援として良い結果が得られたと分析する。

特にその中でも何人かが、富山県の大学だけでなく、首都圏の大学も選択肢として加えるようになったことは、地方特有のキャリア問題の解消でもあり、首都圏の大学生であるからこそ挙げられた成果である。

(2) 意義

①高校生にとっての意義

大学生との交流は、高校生たちにとって自分の進路のイメージをつくるきっかけになるのではないだろうか。大学生と交流し、大学生活を知ることで、今後のイメージをつくるきっかけとなる。また、大学生がどのように進路を選択したのかを経験と共に話すことで、高校生の進路選択の参考となったのではないだろうか。

地方特有のキャリア問題についても、首都圏の大学生と関わることは、将来を考える良い刺激となっただろう。

また、本企画は年間を通じて定期的に実施したため、キャリアを考える機会が確保されたのではないだろうか。様々な人々と関わることはキャリアを形成していく上で重要なことである。本企画の実施により、友人、大学生とキャリアについて話し合えたことは、幅広い視野の獲得につながると考える。

②大学生にとっての意義

本企画に参加したことにより、大学生は高校生の悩みや問題に触れる機会を得た。また、学部、ゼミ、文献講読によって得た知識を教育現場で実践的に触れることが出来た。さらに、高校生との関わりの中で大学生自身も自己の経験を振り返ることが出来た。振り返りを通じて、自己のキャリア形成の手助けとなっただろう。

(3) 所見

学部やゼミでの学びを、教育現場に第三

者として入ることは、今までの学びの再確認と現場の実情を知ることができるものであった。大学生の新たな問題意識を生じさせることとなっただろう。

また、地方と首都圏との進路に対する考え方というものを本企画で目の当たりにした。特に地方では、地方特有のキャリアが固定化される。その固定化の要因は「ローモデルの不足」である。大学生が首都圏に集中することにより、地方には大学生のようなローモデルが残りづらくなってしまう。就職する場合でも、限られた職業が選択肢となる。本企画は、そうしたローモデルの提供でもあったのではないだろうか。